（4 月 29 日）「マルコによる福音書 3：13～19」
イエスが山に登って、これと思う人々を呼び寄せられると、彼らはそばに集まって来た。
（マルコによる福音書 3 章 13 節）

・わたしたちが弟子を選ぶとしたら、何を基準にするでしょうか。その人の職業でしょうか、地位でしょうか。学歴でしょうか。イエス様は「これと思う」12 人を選びます。
・イエス様が彼らを弟子にした目的は何だったのでしょうか。聖書に最初に書かれているのは「自分のそばに置くため」です。新しいイスラエルを象徴する 12 人に、イエス様はご自分がなさることを伝えられました。
・12 人の名前は、福音書によって少しずつ違います。誰が、ということが問題なのではありません。12 人がイエス様の思い、すなわち神さまのみ心を伝えて行くということが重要なのです。

（4 月 30 日）「マルコによる福音書 3：20～30」
身内の人たちはイエスのことを聞いて取り押さえに来た。「あの男は気が変になっている」と言われていたからである。
（マルコによる福音書 3 章 21 節）

・イエス様の宣教は、身内の人たちにとって好ましいものではなかったようです。彼らはイエス様の子ども時代や青年時代をよく知っていました。同じような環境で同じように育ったのに、どうして突然変わってしまったのか。
・「気が変になった」、そう彼らは思います。しかしその根底には、妬みややっかみがあったのかもしれません。「自分たちを差し置いて」という心もあったでしょう。
・律法学者にとっても、名もなき大工のせがれが神さまを冒瀆しているとしか思えなかったことでしょう。日々真面目に過ごしている自分たちこそが正しいものなのに、と考えたに違いありません。わたしたちにも同じような思いはないでしょうか。

福　音　書　通　読

4 月

（4 月　1 日）「マタイによる福音書 25：31～46」
そこで、王は答える。「はっきり言っておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。」
（マタイによる福音書 25 章 40 節）

・王は右側の人たちに、「わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれた」と言います。
・ところが右側の人たちには、その自覚がありませんでした。逆に左側にいる人たちは、「わたしたちはそういうことをきちんとやっていた」と主張します。
・この違いは何でしょうか。大事なのはどこに心を向けているかではないでしょうか。王（権力者、自分にとって都合の良い相手）に目を向けるのではなく、今、困っている人や悲しんでいる人と共に歩むことができればと思います。

（4 月　2 日）「マタイによる福音書 26：1～5」
イエスはこれらの言葉をすべて語り終えると、弟子たちに言われた。
（マタイによる福音書 26 章 1 節）

・ついにイエス様の、十字架のときが近づいて来ました。過越祭は出エジプト記 12 章に起源を持つ祭りで、「初子の災い」がイスラエルの人たちのいる場所を「過ぎ越した」ことを記念します。
・過越祭には、小羊のいけにえが必要でした。高台にあるエルサレム神殿から排水溝を通って、ものすごい量の羊の血が流れていたそうです。
・奈良基督教会の洗礼盤の側面には、十字架を背負った小羊が彫られています。この小羊こそ、イエス様です。イエス様はわたしたちの罪の身代わりの犠牲として、その血を流されました。イエス様の十字架と過越の小羊とが、結び付けられたのです。

（4 月 27 日）「マルコによる福音書 3：1～6」
そこで、イエスは怒って人々を見回し、彼らのかたくなな心を悲しみながら、その人に、「手を伸ばしなさい」と言われた。伸ばすと、手は元どおりになった。
（マルコによる福音書 3 章 5 節）

・今日も安息日に起こった物語でした。安息日にはやってはいけないことが細かく決められ、その数は 613 にものぼったそうです。語呂合わせで、「むいみ」と覚えるといいと教えられたこともあります。
・すぐさま死に至らないような病気を治療することも、医療行為として安息日にはしてはならないことでした。しかしイエス様は、そのかたくなな心に怒りを覚え、悲しまれたのです。
・イエス様のこの思いは、ファリサイ派やヘロデ派の人々の怒りを買いました。彼らはイエス様を殺そうと考えます。イエス様の十字架への道がスタートするのです。

（4 月 28 日）「マルコによる福音書 3：7～12」
そこで、イエスは弟子たちに小舟を用意してほしいと言われた。群衆に押しつぶされないためである。
（マルコによる福音書 3 章 9 節）

・「ガリラヤの風かおる丘で　人びとに話された　恵みのみ言葉を　わたしにも聞かせてください」。日本聖公会聖歌集 363 番の 1 節です。イエス様の宣教活動の中心は、ガリラヤのカファルナウムでした。
・エレサレムのような大都市ではなく、カファルナウムという田舎町で、イエス様は人々の間におられました。そして喜びや悲しみ、痛み、苦しみを共感されながら、神さまの愛を伝えていかれたのです。
・イエス様が小舟に乗ったのは、一人でも多くの人に声を届けたいからなのかもしれません。イエス様の声はユダヤだけではなく、ティルスやシドンといった異邦人の地にまで伝わっていきました。

（4 月 25 日）「マルコによる福音書 2：13～22」
ファリサイ派の律法学者は、イエスが罪人や徴税人と一緒に食事をされるのを見て、弟子たちに、「どうして彼は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか」と言った。
（マルコによる福音書 2 章 16 節）

・イエス様はアルファイの子レビに声を掛けます。(マタイ福音書では「マタイ」という名になっていました)。彼は徴税人でした。ローマの手先として同胞のユダヤ人から高額の税を取り立てる彼らは、ユダヤ人の中から排除されていました。
・イエス様はあえて、徴税人や罪人、娼婦たちと共に歩まれます。一緒に食事をされます。それは、本当に神さまを必要としているのは、そのような人たちだからです。
・「ファリサイ」とは「分離する」という意味です。わたしたちの教会は、どこに向かっているでしょうか。神さまを必要としている人と共に食卓を囲み、歩んでいるでしょうか。

（4 月 26 日）「マルコによる福音書 2：23～28」
そして更に言われた。「安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない。
（マルコによる福音書 2 章 27 節）

・新型コロナウイルス感染症が猛威を振るう中、「マスク警察」という言葉が一時期流行しました。マスクをしていない人を罵倒する人までいたそうです。
・安息日は神さまから与えられたお恵みでした。7 日目に奴隷も家畜も労働から解放され、休息が与えられるというものでした。しかしいつの間にか、何もしてはいけない日に変わっていきます。そして人の行動を監視する人も出てきたのです。
・安息日を含む神さまからのお恵みは、わたしたちが生きる者となるために与えられています。人を裁き、人を枠の中に押し込めるためにあるのではありません。教会の働きも同じです。人を裁くことは、神さまのみ心ではないのです。

（4 月　3 日）「マタイによる福音書 26：6～13」
この人はわたしの体に香油を注いで、わたしを葬る準備をしてくれた。
（マタイによる福音書 26 章 12 節）

・マタイ 2 章には、東方からやって来た占星術の学者たちがイエス様に贈り物をする場面が描かれています。黄金、乳香、没薬というものを献げと聖書は記します。
・乳香というのは、油のことです。当時のユダヤでは人が亡くなると、火葬や土葬ではなく、岩山にある横穴などに入れ、入口を石でふさいでいました。そのため遺体は自然に腐敗していたそうです。
・その腐敗を遅らせるために、亡くなった人の身体に油を塗っていました。ですからこの女性がおこなったことは、まさに葬りの準備だったのです。彼女は自分ができる最高のことを、イエス様に対しておこないました。

（4 月　4 日）「マタイによる福音書 26：14～25」
弟子たちは非常に心を痛めて、「主よ、まさかわたしのことでは」と代わる代わる言い始めた。
（マタイによる福音書 26 章 22 節）

・イエス様の 12 弟子の一人であるユダが、イエス様を裏切ることを決意します。彼はどうして裏切ったのでしょうか。イエス様を誰よりも愛していたからとか、サタンの仕業だとかいろいろ言われますが、これも神さまのご計画だったのでしょう。
・イエス様は過越の食事をおこないます。これが一般に「最後の晩餐」と言われる食事です。その席上、「あなたがたのうちの一人がわたしを裏切ろうとしている」と弟子たちに言われます。
・彼らは代わる代わる「まさかわたしのことでは」と尋ねます。裏切り者はユダだけではなく、イエス様を見捨てることになるすべての弟子たちだったのかもしれません。そしてわたしたちも、何度もイエス様を裏切ってきたことも忘れてはならないと思います。

（4 月　5 日）「マタイによる福音書 26：26～35」
言っておくが、わたしの父の国であなたがたと共に新たに飲むその日まで、今後ぶどうの実から作ったものを飲むことは決してあるまい。」
（マタイによる福音書 26 章 29 節）

・この「最後の晩餐」の場面はイエス様の十字架から 2000 年経って今でも、世界中の基督教会で記念され、守られています。パンを裂き、同じ杯からいただくということを聖公会では大切にしています。
・当時、過越祭のときにはぶどう酒が用いられていました。しかしここでイエス様は「ぶどうの実から作ったもの」と言われています。「ぶどう酒」とは明記されていません。
・その後、イエス様はペトロが三度、イエス様を知らないと言うことを予告します。イエス様の前では強がっていても、結局は弱いペトロを見て、少しホッとするのはわたしだけでしょうか。

（4 月　6 日）「マタイによる福音書 26：36～46」
そして、彼らに言われた。「わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、わたしと共に目を覚ましていなさい。」
（マタイによる福音書 26 章 38 節）

・今日の箇所には、「悲しむ」イエス様の姿が描かれています。イエス様は何を悲しんでおられるのでしょうか。ご自分が十字架に向かわなければならないことに対してでしょうか。それとも飼い主のいない羊のような群衆から離れなければならないからでしょうか。
・悲しみの中で、イエス様は祈られます。それは父である神さまのみ心を知るためでした。「できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください」というイエス様の祈りが胸に突き刺さります。
・またイエス様はゲツセマネに一人では行かれませんでした。三人の弟子を連れて行き、「共に目を覚ましていなさい」と言われます。結局弟子たちは眠ってしまいましたが、イエス様は彼らに一緒にいて欲しかったのです。

（4 月 23 日）「マルコによる福音書 1：35～45」
朝早くまだ暗いうちに、イエスは起きて、人里離れた所へ出て行き、そこで祈っておられた。
（マルコによる福音書 1 章 35 節）

・イエス様は祈ります。ここで「人里離れた所」と訳されている言葉は、イエス様が誘惑を受けられた「荒れ野」と同じ語です。イエス様は「荒れ野」で神さまのみ心を聞くために、祈られます。
・しかし弟子たちはイエス様を捜します。この「捜す」に当たる原語には、「悪意をもって捜す」というニュアンスが含まれます。「イエス様、もっと奇跡を起こしてください。そうしたらみんなあなたの言うことを聞きますよ」、そんな誘惑も聞こえてきそうです。
・続いてイエス様は、重い皮膚病の人をいやされます。彼はいやされた後、「誰にも何も話さないように」命じられますが、人々に大いに言い広めます。イエス様の福音に出会ったら、その喜びを伝えずにはおられないとも言えます。

（4 月 24 日）「マルコによる福音書 2：1～12」
イエスはその人たちの信仰を見て、中風の人に、「子よ、あなたの罪は赦される」と言われた。
（マルコによる福音書 2 章 5 節）

・今日の物語は 4 人の人が中風の人(新しい翻訳では体の麻痺した人)をイエス様の元に連れてくるというものです。体が麻痺した人は床ごと連れて来られましたが、人が一杯でイエス様の近くに行くことはできませんでした。
・彼らは家の屋根をはがします。わたしたちの感覚だととんでもないことですが、イスラエルにはあまり雨が降らず、屋根は角材の上を木の枝を編んだものや粘土で覆うような簡単な物でした。
・だとしても 4 人は待っていればいいのに、とは思わないでしょうか。彼らはしかし「すぐにイエス様に会わせたい」と願ったのです。イエス様はその信仰を見られたのです。

（4 月 21 日）「マルコによる福音書 1：21～28」
人々はその教えに非常に驚いた。律法学者のようにではなく、権威ある者としてお教えになったからである。
（マルコによる福音書 1 章 22 節）

・当時、律法学者たちは自分の言葉に正当性を持たせるために、「ラビ(先生)A は〇〇と言ったとラビ B は言っている」というように、昔の人の権威を持ち出していました。これは別の箇所で、「昔の人の言い伝え」とも書かれています。
・それに対してイエス様は、ご自身の言葉で教えられます。「わたしは言っておく」と、自分自身を権威ある者とされました。このイエス様の言葉やおこないを人々は、「権威ある新しい教えだ」と論じ合いました。
・ここに汚れた霊に取りつかれた男が出てきます。「汚れた」は「聖い」と区別されており、その人は礼拝や交わりから排除されていました。しかしイエス様は、その「汚れた」人とも関わるのです。

（4 月 22 日）「マルコによる福音書 1：29～34」
町中の人が、戸口に集まった。
（マルコによる福音書 1 章 33 節）

・イエス様はペトロとアンデレの家に行きます。彼らはすべてを捨てて従ったとありますが、家族との完全な決別をしているわけではありませんでした。伝説によるとペトロの妻は、後にカファルナウムの自宅を会堂(教会)にしたそうです。
・そこにペトロのしゅうとめがいました。彼女は熱を出していました。しかしイエス様が手を取って起こされます。この「起きる」という語は、「復活する」に通じる言葉です。
・イエス様はその後もたくさんの人を起こし、その結果、町中の人が集まってきます。その中でイエス様は、悪霊にものを言わせませんでした。それはご自分の正体を人々に知らせたくなかったからかもしれません。イエス様の本当の姿がわかるのは、十字架のときなのです。

（4 月　7 日）「マタイによる福音書 26：47～56」
そこで、イエスは言われた。「剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる。」
（マタイによる福音書 26 章 52 節）

・イエス様はついに逮捕されます。祭司長たちや民の長老たちは大勢の群衆を遣わします。祭司長や長老は自分たちの手を汚したくなかったのでしょうか。群衆はイエス様を知らなかったのでしょう。ユダがイエス様の元に近寄ります。
・ユダがイエス様に言葉をかけ、接吻したとき、イエス様はユダに「友よ、しようとしていることをするがよい」と言われます。「友よ」という言葉を聞いて、ユダの心にはどのような思いが溢れたのでしょうか。
・逮捕されるイエス様を守ろうと、武器で対抗しようとする人がいました。しかしイエス様は、剣をさやに納めるように命じられます。「左の頬を打たれたら右の頬を差し出せ」という言葉が思い起こされます。

（4 月　8 日）「マタイによる福音書 26：57～68」
さて、祭司長たちと最高法院の全員は、死刑にしようとしてイエスにとって不利な偽証を求めた。
（マタイによる福音書 26 章 59 節）

・イエス様は大祭司カイアファのところに連れて行かれます。そこには律法学者たちや長老たちも集まってきます。彼らはイエス様をどうしても死刑にしたいと考えているようです。
・彼らはどうしてイエス様を死刑にしたかったのでしょうか。クーデターをおこされるとローマ帝国は困りますが、彼らはそれほど困らないようにも思います。
・彼らは、イエス様が神さまを冒瀆していると言います。自分たちが大切にしている神殿を打ち倒すという言葉を、彼らは受け入れることができませんでした。しかしわたしたちもまた、神さまに従うときにはこれまでの自分を捨て、新たな自分にならなければならないのです。

（4 月　9 日）「マタイによる福音書 26：69～27：2」
そのとき、ペトロは呪いの言葉さえ口にしながら、「そんな人は知らない」と誓い始めた。するとすぐ、鶏が鳴いた。
（マタイによる福音書 26 章 74 節）

・タイトルは忘れましたが、昔映画でこの場面を見た覚えがあります。ペトロの顔は、たき火にあたって真っ赤でした。そんな彼は次々と言われます。「あなたもそこにいた」と。
・ペトロは必死になって打ち消しますが、3 度否定したそのときに鶏が鳴きます。そのときに大祭司の屋敷で裁判を受けていたイエス様がちょうど出てきてペトロと目が合う、という演出がされていました。
・そのときのイエス様の表情はどうだったのでしょうか。怒っていたでしょうか。悲しんでいたでしょうか。「ペトロ、言っただろ。お前はわたしを知らないって言うって。しょうがない奴だなあ」と言って笑っているでしょうか。

（4 月 10 日）「マタイによる福音書 27：3～14」
そこで、ユダは銀貨を神殿に投げ込んで立ち去り、首をつって死んだ。
（マタイによる福音書 27 章 5 節）

・イエス様を裏切ったユダは、後悔しました。そして銀貨を神殿に投げ込み、首をくくりました。（ユダの最期は使徒言行録 1 章 18 節にも書かれていますが、その内容はマタイ福音書とは大きく異なります）。
・ユダは地獄に落ちてしまったのでしょうか。イエス様を裏切り、死に渡してしまったのですから、そうかもしれません。でも自分がしてしまったことを心から悔やんでいるのだとすれば、神さまが手を差し伸べて欲しい、そう思います。
・イエス様はピラトの尋問に対しても、何も答えませんでした。「屠り場に引かれる小羊のように　毛を刈る者の前に物を言わない羊のように　彼は口を開かなかった。」（イザヤ書 53 章 7 節）、これはまさしくイエス様の姿でした。

（4 月 19 日）「マルコによる福音書 1：9～15」
「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と言われた。
（マルコによる福音書 1 章 15 節）

・マタイ福音書では 3 章 13 節～4 章 17 節に書かれていた「イエス、洗礼を受ける」、「誘惑を受ける」、「ガリラヤで伝道を始める」という三つの単元が、マルコ福音書ではたった 7 節にまとめられています。「荒れ野の誘惑」はわずか 2 節です。
・誘惑の場面で、イエス様は野獣と共におられたと書かれています。野獣は悪の力と結び付けられますが、その野獣が手なずけられているとも考えられるこの記述は、何を意味しているのでしょうか。
・14、15 節の小見出しは、新共同訳では「伝道」という言葉が用いられていましたが、新しい協会共同訳では「宣教」に変わっています。「伝道」と「宣教」について、分かち合いたいですね。

（4 月 20 日）「マルコによる福音書 1：16～20」
イエスは、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と言われた。
（マルコによる福音書 1 章 17 節）

・これから宣教活動を開始されるイエス様が弟子として選んだのは、4 人の漁師でした。宣教活動に漁師は役に立つのでしょうか。舟で離島をまわるのであれば必要かもしれませんが、イエス様はほとんど舟を使われませんでした。
・また祭司のように神殿にいたわけでも、律法学者のように学んでいたわけでも、ファリサイ派のように敬虔な生活をしていたわけでもありませんでした。彼らはガリラヤにいる、普通の漁師だったと思います。
・イエス様は彼らの日常生活を御覧になり、「人間をとる漁師」となるように招かれます。わたしたちも日々の生活の中でイエス様に招かれるとき、すべてを捨てて従いたいものです。

（4 月 17 日）「マタイによる福音書 28：11～20」
あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。
（マタイによる福音書 28 章 20 節）

・イースターおめでとうございます。今日の箇所の後半には「弟子たちを派遣する」という内容が書かれています。マタイ福音書の特徴として、ガリラヤで復活のイエス様と弟子たちが出会うということがあります。
・20 節 7 節で天使は「（イエス様は）あなたがたより先にガリラヤに行かれる」と女性たちに告げます。そして弟子たちはガリラヤの山の上で復活のイエス様に出会うのです。
・ガリラヤの民衆の間で宣教を開始されたイエス様は、また民衆の間に戻られます。そしてそこから、弟子たちは遣わされるのです。わたしたちのところにも復活のイエス様は来られます。そしてイエス様と共に歩むのです。

（4 月 18 日）「マルコによる福音書 1：1～8」
神の子イエス・キリストの福音の初め。
（マルコによる福音書 1 章 1 節）

・本日からマルコによる福音書を読んでいきます。マタイやルカ福音書にはイエス様の降誕物語が描かれていましたが、マルコ福音書にはそれがありません。
・マルコは福音書の中で最初に書かれたと考えられています。それはイエス様の十字架から 30 年ほど経った頃でした。マルコの著者が書き残したかったのは、イエス様がどのように人々の間で働かれ、福音（グッドニュース）を伝えていったかということです。
・「神の子」であるイエス様がどのように人々に、そしてわたしたちに関わっていかれるのか、その生き生きとした姿を今日からご一緒に感じていきましょう。

（4 月 11 日）「マタイによる福音書 27：15～26」
ピラトが、「では、メシアといわれているイエスの方は、どうしたらよいか」と言うと、皆は、「十字架につけろ」と言った。
（マタイによる福音書 27 章 22 節）

・聖餐式のときに唱えるニケヤ信経の中に、このような言葉があります。「ポンテオ・ピラトのもとで、わたしたちのために十字架につけられ」。しかし今日の箇所を読む限り、ピラト一人にイエス様の十字架の責任を負わすのはどうなのかと思います。
・ピラトは妻が夢で苦しんだという話を聞きます。その話を聞いて、イエス様を裁くことを躊躇したのかもしれません。「バラバかイエスか」という選択を群衆に求めます。群衆は叫びます。「イエスを十字架につけろ！」と。ピラトはその叫びに屈したにすぎないのです。
・この場面に自分がいたとしたら、どうしていたでしょうか。何も言うことができずにじっと佇んでいるのか、それとも周りの群衆と一緒に「十字架につけろ！」と叫んでしまうのでしょうか。

（4 月 12 日）「マタイによる福音書 27：27～31」
そして、イエスの着ている物をはぎ取り、赤い外套を着せ、茨で冠を編んで頭に載せ、また、右手に葦の棒を持たせて、その前にひざまずき、「ユダヤ人の王、万歳」と言って、侮辱した。（マタイによる福音書 27 章 28～29 節）

・このイエス様の姿から、わたしたちは何を感じるでしょうか。メル・ギブソンが制作した「パッション」という映画では、これらの光景がとてもリアルに描かれており、直視することができなかったのを思い出します。
・イエス様は立派な着物をまとい、黄金の冠をかぶり、金の笏を持った王とはなりませんでした。人々から馬鹿にされ、蔑まれ、唾を吐かれ、侮辱される、そのような王となられたのです。
・しかし一番低いところに立たれるイエス様だから、わたしたちを支え、わたしたちが生きる者となるように導いてくださるのです。そしてそれこそが、神さまのみ心なのです。

（4 月 13 日）「マタイによる福音書 27：32～44」
そこを通りかかった人々は、頭を振りながらイエスをののしって、言った。「神殿を打ち倒し、三日で建てる者、神の子なら、自分を救ってみろ。そして十字架から降りて来い。」
（マタイによる福音書章 39～40 節）

・「十字架の道行き」をご存じでしょうか。カトリックの教会で大切にされ、修道院や黙想の家などに設けられていることもあります。奈良基督教会でも、2018 年に井田司祭が祈りと黙想の時間をもたれました。
・十字架の道行きの中で、十字架を担ぐイエス様は何度も倒れます。そしてイエス様の代わりに、たまたま通りかかったキレネ人のシモンが十字架を担ぐことになります。
・聖書ではイエス様が倒れたとは書かれていません。しかしご自分を支える十字架は大変重たく、肩にずっしりと食い込んでいたことでしょう。できることならその重荷を共に担いたい、心からそう思います。

（4 月 14 日）「マタイによる福音書 27：45～56」
三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。（マタイによる福音書 27 章 46 節）

・イエス様のこの叫びは、何を意味しているのでしょうか。この言葉は詩編 22 編の冒頭部分と同じものです。詩編 22 編を最後まで読んでみると、そこには神さまへの賛美が綴られています。
・詩編の冒頭を叫べば、周りの人たちは続きを覚えているはずだから、言いたいことが伝わるだろう。そう思われたのでしょうか。そうではないと思います。イエス様はこのとき、神さまに対する嘆きしか語ることが出来なかったのではないでしょうか。
・しかしイエス様は同時に知っておられるのです。その嘆きは、必ず賛美に変えられることを。明日 15 日は受苦日(聖金曜日)です。教会では 13 時より礼拝をおささげします。イエス様の十字架を思い、お祈りいたしましょう。

（4 月 15 日）「マタイによる福音書 27：57～66」
マグダラのマリアともう一人のマリアとはそこに残り、墓の方を向いて座っていた。
（マタイによる福音書 27 章 61 節）

・今日 4 月 15 日は受苦日（聖金曜日）です。イエス様が十字架につけられたことを覚える日です。そしてその夕方には、アリマタヤのヨセフがピラトからイエス様のご遺体を引き取ります。
・わたしたちは次の日曜日には喜びの朝が待っていることを知っています。しかし 2000 年前は違っていたでしょう。イエス様が収められたお墓を向いて座る二人のマリアの心の中は、悲しみが支配していました。
・わたしたちも今日、明日と、お墓のイエス様を思い起こしましょう。わたしたちのためにどうぞ復活のお姿をお示しください、そのお祈りを共におささげしましょう。

（4 月 16 日）「マタイによる福音書 28：1～10」
すると、イエスが行く手に立っていて、「おはよう」と言われたので、婦人たちは近寄り、イエスの足を抱き、その前にひれ伏した。
（マタイによる福音書 28 章 9 節）

・「日ごとの聖書」では、一日早く「復活のイエス様」に出会います。復活日は明日 17 日、みなさんとご一緒にイエス様のご復活を喜びたいと思います。
・イエス様のお墓に向かったのは、女性たちでした。安息日は土曜日の日暮れに終わります。それから夜が明けるのを今か今かと待っていたことでしょう。しかし彼女たちはまさか復活のイエス様にお会いできるとは思ってもいませんでした。
・天使に喜びの知らせを聞かされた彼女たちは、大急ぎで弟子たちの元に向かいます。そこにイエス様が立っていました。イエス様は「おはよう」と言われます。新たな日常が始まるのです。「おはよう」という何気ない言葉が、彼女たちの目から涙をぬぐったのです。